はじめに

薩長連合が倒幕に動き、王政復古の大号令が発せられ、西郷と勝の会談によって江戸城が無血開城されて、明治維新となる。そして、文明開化の世の中がやって来る。

幕末・明治初期の日本人は、どのような気持ちで日々を過ごしていたのだろうか。

尊王攘夷思想に心酔した人々、倒幕に燃えた人々、西洋文化に圧倒された人々、列強に追い付かねばと真剣に考えた人々、……。

彼らの思いは、今からは想像も及ばない、厳しく苦しいものだったにちがいない。

しかし、それらは確実に現在のわれわれの存在につながっているものでもある。

近代天皇制のもと、富国強兵と殖産興業に邁進した結果、めざましく発展した日本は、昭和初期に軍部が政治を掌握し、太平洋戦争への道を突き進んでしまった。戦後に復興を遂げ、高度成長して、さらに言えばバブルがはじけ、東日本大震災があって、今日の日本がある。日本人は、幕末以降、欧米にいかに追い付き、伍して戦うかという課題にずっと追いまくられてきた。

その間、日本人の思考を支えたのは、本書でも論じる〈和〉〈漢〉〈洋〉という三つの教養だっ

SAMPLE

た。それ以前は、江戸時代に〈洋〉からの影響が見られるものの、基本的に〈和〉〈漢〉であったから、幕末・明治初期に本格的に〈洋〉が加わって、それが今日まで続いていることの意味は大きい。

身近な例を考えても、現代医学では、東洋医学もある程度尊重されてはいるものの、西洋医学が圧倒的な存在感を持っていよう。音楽も、そうだ。邦楽は今日まで命脈を保ってはいるものの、現代音楽は主に洋楽に影響を受けて形作られている。これは明治時代に軍隊に関連して西洋からマーチが移入されたことに起因する。

本書において、〈洋〉の付加によって〈和〉〈漢〉も含めて大きな変容を迫られる日本的教養を具体的に把握し、これからの日本人の教養のありかたを模索していただければ、ありがたい。

鈴木健一

SAMPLE

目次

はじめに……鈴木健一 (1)
序論　変容する教養――近代における〈和〉〈漢〉〈洋〉……鈴木健一 1

I　〈和〉が形成する基盤

尊王攘夷論と大和魂――本居宣長から吉田松陰へ……田中康二 27
実録から講談・歴史的読み物へ――「中山大納言物」を例に……菊池庸介 51
紀行「易心後語」に見る幸田露伴の教養の根柢――古人に向きあうということ……出口智之 72
手習塾から小学校へ……橋本昭彦 93

SAMPLE

II 〈漢〉はどこへ行くのか？

書における近代的教養——清朝書学との交差をめぐって……鍋島稲子 125
「文粋もの」における朱子学と陽明学の折衷……山本嘉孝 154
ポッケと修養——明治期『菜根譚』出版の後景……磯部敦 176
徳富蘇峰の思想と文体——『国民之友』創刊前後……木村洋 198

III 〈洋〉がもたらすもの

日本語と西洋との邂逅……山東功 221
新たな「智」の形成——福澤諭吉と慶應義塾……西澤直子 240
岩倉使節団における文化比較と翻訳——モンテスキュー著・何礼之訳『万法精理』…多田蔵人 269
討論の条件——論争誌としての『明六雑誌』……菅原光 289

SAMPLE

内国勧業博覧会と和・漢・洋――本草学と博覧会……國　雄行　309
円朝と「西洋」――翻案作概観と「英国孝子伝」「黄薔薇」「蝦夷土産」の方法について……今岡謙太郎　329
後　記……鈴木健一　351
執筆者一覧……352

SAMPLE

序論

変容する教養

——近代における〈和〉〈漢〉〈洋〉

鈴木健一

SAMPLE

一　基本的な問題意識

古典の時代において、教養とは、和歌・漢詩文を中心として、歴史・思想・宗教・科学といった諸分野にまたがる基礎的知識だったと一応定義できる。それらが磁場として働き、日本の文化を形作る上で大きな影響を及ぼしていった。

そして、近世においては、出版文化の隆盛とともに、庶民へと浸透した。教養の大衆化である。[1]

そういった教養が浸透するありかたの原型が形作られるのは、近世初期——慶長（一五九六～一六一五）から寛永（一六二四～四四）にかけて——であった。[2] この時期には、戦国の世が収束したため、古典が復権し、〈雅〉が再生・強化される一方、〈俗〉も台頭し、そこに出版文化が確立して、教養が浸透する回路の基本形が作られたの

である。

それを近世の入口とするなら、出口はどうだったのか。そこに目を転じてみると、教養が大きく変容していく状況をうかがい知ることができるだろう。

幕末・明治初期においては西洋文明からの影響が甚だしく、古来日本人が捧げ持ってきた教養は変質を迫られることになる。

本書では、〈和〉〈漢〉〈洋〉という三つの視点を導入することによって、変容する教養のありかたを析出したいと考えている。

もちろん、〈和〉〈漢〉〈洋〉という学問のありかたは、近世後期から存在していた。〈和〉は、中期の賀茂真淵から後期の本居宣長にかけて、国学が隆盛を極めたことに顕著である。〈漢〉では、寛政二年（一七九〇）の寛政異学の禁により朱子学への集中が促され、林家の私塾が湯島の聖堂学問所として官学化されていたのが、同九年には昌平坂学問所として幕府の直轄となっていた。〈洋〉では、主に蘭学が学ばれ、文化八年（一八一一）に蛮書和解御用、安政三年（一八五六）に蕃書調所、文久二年（一八六二）に洋書調所（翌年、開成所）がそれぞれ設置され、洋学の学問所が発展していった。すなわち〈漢〉〈洋〉が幕府公認の学問だったとも言える。

ただし、〈洋〉の圧倒的な存在感、これは明治時代になってからのことであろう。

二　〈和〉の近代的な展開

日本人にとって〈和〉の要素は、自らの存在意義に関わる、きわめて本質的なものである。明治時代になって、

SAMPLE

西洋の文物が尊ばれたとしても、〈和〉は強固にその価値を主張し続けたと言えるだろう。

学制改革と国学

もっとも、幕末・明治初期の国学は、宣長やその門下を中心とした後期のさかんな勢いには及ぶべくもない。その状況を挽回するため、この時期の学校制度の改変の中で、国学の復権が目指されていくことになる。(3)

慶応四年（明治元年）には京都で皇学所（こうがくしょ）が開校した。明治二年正月に定められた「皇学所規則」において、教科・科目は、

本教学　神典　皇史　地志　系譜
経済学　礼儀　律令　兵制　食貨
辞章学　歌詞　詩文　書法
図書芸技学　天文　医術　卜筮　音楽　律暦　算数

とあり、また授業科目・書名は以下の通りとなっている。

正月某日講義　古事記表文
毎月二七日講義　神典　天神寿詞（あまつかみのよごと）、古事記、日本紀、古語拾遺、祝詞式（のりとしき）　二日歌詞会、七日詩文会　於（きょく）
局（ちゅう）　中（において）　為（これをなす）之

SAMPLE

三八日講義　律令　令義解、三大格、儀式、延喜式、法曹至要抄
四九日会読　皇史　五国史、日本逸史、大日本史、論語（此以下は局中にて為之）、大学、中庸、書経、易経、孝経
五十日講義　歌辞　万葉集、新撰万葉集、古今集、詩文集（局中にて為之）

全体として〈和〉が主体となっていることがわかるだろう。しかし、皇学所は明治三年七月には廃校となってしまう。

その一方、東京では、明治二年六月に昌平学校（もと昌平坂学問所）が大学校と称されるようになる。そこでは、皇学派と漢学派が対立し、いわゆる学神祭紛争も起きている。これは、昌平坂学問所がそもそも林家の塾であり儒学を奉じていたため孔子とその門人の霊を祀っていたのに対して、皇学派が、八意思兼神を主神とし久延毘古神を副神として祀ることを主張し、漢学派と対立したというものである。他にもいくつかの対立点があり、結果的にこの闘争は、漢学派が勝利する。まだまだこの時期には、〈漢〉の力が強かったのだ。それだけ儒学教育が浸透していたとも言えるだろう。

なお、この大学校で舎長をつとめた堤長発という学生が二十一歳の明治二年十～十二月に記した日記が残されている。それによると、国書では、『令義解』（養老令の官撰注釈書）『日本書紀』『続日本紀』『三代実録』『文徳実録』『古事記』『万葉集』などの古典、平田篤胤著『玉襷』（文化十年頃成立）、山県禎（太華）編『国史纂論』（天保十年〈一八三九〉刊）、漢籍では『左伝（春秋左氏伝）』『孝経』を読んでいる。特に熱心に勉強しているのは『令義解』や『日本書紀』以下の六国史で、漢籍より国書に親しんでいることがわかるのである。いかにも当時の教養は

SAMPLE

〈和〉中心であったかに思われがちだが、事態はそれほど単純ではない。堤長発は、日向国高鍋藩の上級士族の子で、藩校で学んだ後、父とともに江戸にやって来たのだが、その彼がこのように国書に親しんでいるのは、すでに藩校で漢籍を一通り勉強しており、むしろ国書が目新しく、いかにも維新的な新しい学問として捉えられていたからではないかと、大久保利謙氏は推測している。(4) つまり、近世末期の日本人の知識層の基礎教養は漢学であって、それが王政復古の時代に当たって、むしろ国書が新鮮なものとして彼らの目に映じたということなのであろう。

この後、明治十年には東京大学が誕生し、その文学部には和漢文学科が設置され、同十九年には帝国大学と改称し、文学部は文科大学となる。和漢文学科は和文学科と漢文学科に分かれ、三年後に和文学科は国文学科となる。その間、小中村清矩（本居内遠門、一八二一～九五）・物集高見（平田銕胤門、一八四七～一九二八）・黒川真頼（黒川春村門、一八二九～一九〇六）ら、国学の系譜を引く人々が教官となっていた。

明治時代以降、国文学はヨーロッパの文学史観や文献学の影響を受けて、近代的な装いを身に着けたわけだが、近世の国学からの連続面も見逃せないのである。

鈴木弘恭による古典の注釈書

明治初期に、積極的に古典の注釈書を刊行した人物として鈴木弘恭を挙げておきたい。(5)

鈴木弘恭は、弘化元年（一八四四）に水戸で生まれ、弘道館国学局で国学を学び、水戸藩士で国学者の間宮永好に詠歌を学んだ。維新後、黒川真頼に従って国書を研究している。明治十年の頃、国文学をさかんにしようとして田中頼庸、井上頼圀らが起こした研文会に入会し、尽力した。同十六年には国史を整えようとして、副島種臣、

SAMPLE

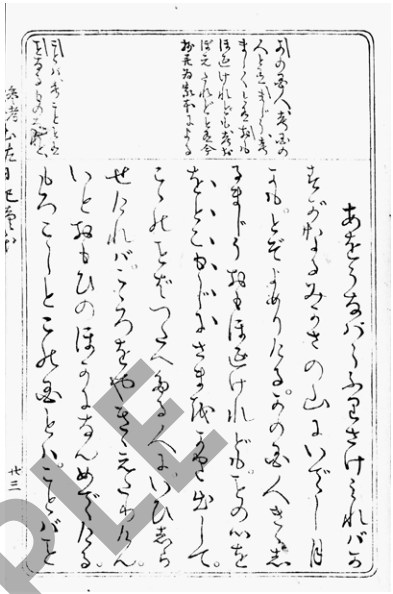

図1『参考評註土佐日記読本』

谷干城、丸山作楽、井上頼圀らとともに史学協会を創設した（同十九年、廃会）。同十七年には、学習院助教となる。この時、四十一歳だった。この頃、『参考評註十六夜日記読本』（明治十六年序）『参考評註土佐日記読本』（同十八年刊）などの古典注釈を出版している。国文学の注釈書の刊行が必ずしも活発ではない時期に、このような出版物を次々と刊行したことの意義は小さくない。参考までに図1に『参考評註土佐日記読本』の一部を掲げた。簡便な注といった趣である。

なお、弘恭は晩年女子教育に力を注ぎ、明治三十年、五十四歳で没した。

和歌史における緩やかな展開

〈和〉の分野の中心な文芸である和歌の場合、明治二十年代後半に与謝野晶子・石川啄木・正岡子規らが綺羅星の如く登場してきて、天才たちの手によって近代短歌の革新はなされたかに思われる。そういう側面も否定はしない。ただ、それ以前から少しずつ変化の兆しはあった。近世後期、堂上では光格天皇歌壇[6]があり、地下では香川景樹が率いる桂園派が勢力を伸ばすというように、近世和歌史が厚みを持って形成されており、さらに明治時代まで桂園派の流れにある旧派和歌[7]が存続したことによって、近世から近代への転換は緩やかに達成された。

SAMPLE

近世からの連続面もまた見逃せないのである。(8)

近世から近代への連続面と断絶面が両方感じ取れる事例を挙げておこう。

明治時代になって登場する新しい事物を表現する際にも、和歌が詠まれた。これを新題和歌と言う。佐々木弘綱編『明治開化和歌集』（明治十三年刊）から一首を引こう。

洋服　　藤井守行

うれしさを心のうちにつゝめとや袂ゆたかにたゝぬなるらん　（雑・六三三番）

歌意は、うれしさは袂ではなく心の中に包んでおくようにというので、洋服は袂を大きくゆったりと裁たないのであろうか。和服では袂がたっぷりとあり、古典和歌では、

うれしきを何に包まむ唐衣袂ゆたかに裁てと言はましを　（古今集・雑上・読人不知・八六五番）

うれしさを昔は袖に包みけりこよひは身にもあまりぬるかな　（和漢朗詠集・慶賀・読人不知・七七三番）

というように、うれしさは衣の袂に包むもの、あるいはそこから余り出るものだった。しかし、洋服は体にぴったりと合ったふうに袂を裁つ。だから、その袂にはうれしさを包む余地はないので、心の中に包み隠すしかないと歌うのである。〈洋〉の事物の特質を表現する上でも伝統的な〈和〉の発想を踏まえていく、それだけ〈和〉は日本人にとって重要な教養を形作っていたわけだ。そこが連続面であり、洋服という題材を取り上げるところ

SAMPLE

が断絶面だろう。

三　〈漢〉が形成する基盤

なよやかな和語に骨格を与え、引き締まった文体にすること、あるいは論理的に考えること、情報をより多く盛り込むこと、において、漢詩文は日本人にとってなくてはならないものだった。

幕末・明治初期の藩校や私塾でも漢学による教育が行われており、明治初期の政治家や官僚たちの教養にも〈漢〉が多くを占めていた。

漢学は基礎教養

明治時代の歴史小説家塚原渋柿園（一八四八～一九一七）が著した「江戸時代の文教」（國學院雑誌、一九一一年二月、『幕末の江戸風俗』岩波文庫に収録。引用は後者による）には、次のような記述があり、これによって、幕末当時の知識層が若い頃にどのような書物に触れたかがわかる。すべて漢籍である。

先ず学問を初めまして一通りの理窟を師匠から聴きました時分には、（中略）文久の末から元治、その頃で。当時私共青年が読みました書物は何かと申すと、一時廃れて昨今また行われて来たような浅見絅斎先生の『靖献遺言』。それから一方では水戸の会沢先生の拵えました『新論』。それから山陽先生の『政記』とか『外史』とか。その次に塩谷岩陰先生の『隔靴論』。そう云う風な書物。それから支那の書では蘇東坡の『東

SAMPLE

坡策』。蘇老泉の『審敵篇』。陳龍川の『文抄』とか云うのが、当時青年必読の書と云うので頻りに読みました。だからその精神も目的も鎖港攘夷。「外国人を追ッ払うにはどう云う塩梅にしたら宜かろう、戦さに勝てるだろう、勝てないまでも防げるだろう」と云うことの外にほとんど余念も無いのでありました。

文久・元治（一八六一～六五）は明治維新の直前である。漢籍について簡単に注記しておく。全体に時局をよく反映した書目と言えるだろう。

『靖献遺言』は、寛延元年（一七四八）刊。節義を失わなかった中国・日本の忠臣・義士について述べたもので、尊王思想に大きな影響を与えた。『新論』は、会沢正志斎が著したもので、文政八年（一八二五）成立。これも尊王攘夷を唱えたもの。『日本政記』は、弘化二年（一八四五）刊。神武天皇から後陽成天皇までの歴史を漢文体で記す。『日本外史』は、文政九年成立、天保七年頃刊。日本語として十分こなれた漢文体によって、源平二氏から徳川氏までの武家の歴史が調子よく、そして甘美に語られていく（後述）。以上の頼山陽（一七八〇～一八三二）が著した二つの歴史書も尊王論を鼓舞した。『隔靴（鞾）論』は、安政六年（一八五九）刊。海防論を幕府に建言したもの。

『東坡策』は、藤森大雅が蘇東坡の策文二十五を編集したもの。蘇軾（東坡）は、北宋のすぐれた詩人だが、政争に巻き込まれ、直言癖もあって、しばしば左遷され、地方長官を歴任した。「審敵」（唐宋八大家文読本・巻十七）の著者蘇洵（老泉）は、蘇軾の父。「審敵」は、契丹への歳幣を中止すれば、契丹は侵攻してくるはずで、その背後を断って殲滅させよとの強硬策を唱える。『陳龍川文抄』の著者陳亮（龍川）は、南宋の思想家、文学者で、金との抗戦を主張した憂国の士でもあった。

SAMPLE

『日本外史』の絶大な影響力

近世後期の〈漢〉的な教養の中で最も大きな影響を日本人に与えたものは何であったか。いくつかの答は想定しうるものの、一つを選ぶということであれば、やはり頼山陽著『日本外史』が指を屈せられるべきであろう。

亡命ロシア人革命家メーチニコフ（一八三八～八八）が著した日本回想記『回想の明治維新』（ロシア報知、一八八三～八四年。岩波文庫・渡辺雅司氏訳によって引用）でも、

一八一九年に出版された最良の日本史ともいうべき『日本外史（ニッポンガイシ）』（翻訳すれば外から見た歴史、つまり日出ずる国のプラグマチックな歴史と言いかえられよう）は、すべての学校で採用され、ほかでもない今述べたような唯一の天皇権力の復活のための、なんとも奇妙で、熱烈な宣伝の書となった。

と記されているし、また、内村鑑三（うちむらかんぞう）著『後世への最大遺物』（明治二十七年講演）の中でも、

今日の王政復古を持来した原動力は何であつたかと云へば、多くの歴史家が云ふ通り山陽の日本外史が其一でありし事は能く分て居る。山陽は其思想を遺して日本を復活させた。今日の王政復古前後の歴史を悉く調べて見ると山陽の功の非常に多い事が分る。私は山陽の外のことは知りませぬ。かの人の私行に付ては二つ三つ不同意な所があります。彼の国体論や兵制論に就ては不同意であります。併し乍ら彼れ山陽の一つのAmbition（アンビション）即ち「我は今世に望む所は無いけれども来世の人に大に望む所がある」と云つた彼の欲望は私が実に彼を尊敬して已まざるところであります。乃ち山陽は日本外史を遺物として死んで仕舞て、骨は洛陽東山

SAMPLE

に葬つてありますけれども、日本外史から新日本国は生れて来ました。

というように、同書が幕末の動乱や明治維新を招来する原動力になったとの認識が示される。

なお、『東京日日新聞』の明治十八年八月十六日の記事には、

川越版の「日本外史」は、これまで年々の刷出高は一万部以上に及びたりしが、近来地方の不景気か、或いは学風一変せし故か、今の割合にては例年より減じたりと云う。

という記事が載り、明治も十数年を過ぎると、影響力は徐々に下がっていたのかもしれない。川越版とは、川越藩博喩堂（江戸藩邸の学舎の名）蔵版によるもので、よく普及した。

もっとも『日本外史』の本文や注釈は、昭和初期まではしばしば刊行されており、その影響力はかなり後まで続いたと言ってよいだろう。[9]

ちなみに明治天皇も、明治八年、二十四歳の時、『日本外史』を素読している（後述）。

西洋の文物を漢詩で表現する

近代に入って、日本人は〈洋〉に多くを学ぶことになるが、その際にも、これまで培っていた〈漢〉の教養が大きく貢献していくことになる。

漢詩人で新聞記者にもなった成島柳北（なるしまりゅうぼく）（一八三七～八四）が明治五年十二月に初めてベルサイユ宮殿に接した時

SAMPLE

に詠んだ漢詩を見てみたい。

烏児塞宮

想曾鳳輦幾回過　　想ふ　曾て鳳輦幾回か過り
来与淑姫長晤歌　　来りて淑姫と長く晤歌せしを
錦帳依然人不見　　錦帳依然たるも人見えず
玻璃窓外夕陽多　　玻璃窓外　夕陽多し

（柳北詩鈔・巻三）

【現代語訳】思いやってみる、かつて王や皇帝が何度もこの宮殿にやって来て、上品な后妃たちとともに歌い楽しんだことを。錦の帳は昔のままだが、当時の人の姿はもう見えない。ガラス窓の外には、夕日が輝いていることだ。

承句には典拠がある。中国最古の詩集『詩経』の陳風に収められている「東門之池」における「彼の美なる淑姫、与に晤歌すべし」という表現を踏まえているのである。ここでは、それを用いて、新たに出会ったフランスの宮殿を称えているわけだ。

この詩は柳北の紀行『航西日乗』にも収められているが、「来」は「好」、「見」は「在」となっている。

新しい知識を取り込むということは、全く白紙の状態からそれを行うわけではない。既知の何かを用いることで理解しやすくする、そのような工夫に基づいて未知のものを消化していくのである。〈洋〉もただそれ自体を摂取するとは限らない。むしろ日本文化に多大な影響を与えた〈漢〉という土台の上に、〈洋〉も根付いていく

SAMPLE

のである。この場合は、中国の詩集の読解によって培われた明治以前の教養を応用することで、フランスの宮殿についての理解も容易に行われたということであろう。(10)

先に取り上げた新題和歌でも、洋服を詠むのに『古今集』などの表現を用いていた。それと同様のありかたがここにも看取されるのだ。

明治詩壇の行方

明治初期の漢詩壇を担ったのは、大沼枕山（一八一八〜九一）の下谷吟社、岡本黄石の麹坊吟社、鱸松塘の七曲吟社らの結社の詩人たちで、特に抜きん出ていたのは下谷吟社である。枕山と同じく梁川星巌に学んだ森春濤は明治七年に上京し、茉莉吟社を起こして詩壇で活躍し、その子槐南や同時期の国分青崖らもそれに続いた。しかし、それ以降、近代短歌がさきほど述べた晶子・啄木・子規らによって花開いたのに比べて、近代漢詩といったものが文学として発展していくことはなかったと言ってよい。漢詩が表現していた抒情性は近代詩に取って代わられ、漢詩文は「文学」ではなく「学問」として扱われるようになっていく。

近世ではきわめて活性化した漢詩（そして漢文）という分野は、明治時代半ばにして文学としての地位を失ってしまったのだ。

少し射程を伸ばして考えてみると、漢詩文作者は減ったとしても、太平洋戦争前、もしくは戦後も昭和三十年代くらいまでは、学校において漢文教育がさかんに行われ、漢文に親しむ日本人はそれなりにいたように思われる。しかし、高度成長とともに漢文教育は衰退し始め、今日の日本人は漢文についての教養をかなり失っているように見える。もしまだ高校生が漢文を学ぶ動機があるとすれば、それはセンター試験で漢文が出題されている

SAMPLE

からという理由のみによるのではないか。

私は昭和三十五年生まれだが、漢文の素養は父の世代の方があり、祖父の世代の方がさらにあった。また、私の教え子たちより私の方がまだしも漢文に親しんで育っている。

日本人にとって〈漢〉の教養はどれほど血肉化したものだったのか。欧米の科学主義に追随して、〈漢〉的な教養をどんどん失っていくことは、未来の日本人にとってどのような意味があるのか。すぐには結論を出せないが、問題提起としてここに記しておく。

四　〈洋〉がもたらすもの

すでに近世から、蘭学が浸透し、日本人の教養は〈洋〉によって変容しつつあった。杉田玄白らがオランダ語で記された医学書『ターヘルアナトミア』を解読し、日本の医学史上に大きな足跡を残した事例などはよく知られていよう。しかしその後、英語を学ぶべき必要性が増してくる。

福澤諭吉と英語

天保五年（一八三四）生まれの福澤諭吉は、十四、五歳（弘化四年〈一八四七〉、嘉永元年〈一八四八〉）頃に漢学を習い、二十一歳（安政元年〈一八五四〉）の時、長崎に出て、蘭学を学び、翌年緒方洪庵の適塾に入り、やがて塾長となる。二十五歳（安政五年）の時に、中津藩の命によって江戸に出、蘭学塾を開いた。二十六歳、横浜に訪れた際、蘭学が役に立たないことを実感し、英語を独習する。二十七歳（万延元年〈一八六〇〉）、咸臨丸に乗り組み、渡米

SAMPLE

した。帰国後は幕府の翻訳方となる。二十八歳（文久元年〈一八六一〉）、幕府の遣欧使節の一員となった。三十一歳（元治元年〈一八六四〉）、幕臣として外国方翻訳局に出仕することとなり、三十三歳（慶応二年〈一八六六〉）から刊行しはじめた『西洋事情』は十五万部以上売れたという。三十四歳（慶応三年）、幕府の軍艦受取委員として再度渡米し、大量の洋書を持ち帰った。新政府からも出仕を求められたが辞退し、平民として慶応義塾の発展に寄与した。没したのは、明治三十四年、六十八歳の時であった。

『福翁自伝』（明治三十年頃口述）にも次のように記してある。英語の原書を買い漁って日本に持ち帰った福澤に先見の明があったということ、慶応義塾の学生が英語を学んでいかにその勢力を拡大していったかということ、がよくわかるのである。

さて四月になったところで普請も出来上り、塾生は丁度慶応三年と四年の境が一番諸方に散じてしまって、残った者はわずかに十八人、それから四月になったところが段々帰って来て、追々塾の姿を成して次第に盛んになる。また盛んになる訳（わ）けもある、と言うのは今度私がアメリカに行ったときには、それ以前アメリカに行ったときよりも多く金を貰いました。ところで旅行中の費用はすべて官費であるから、政府から請け取った金はみな手元に残るゆえ、その金をもって今度こそは有らん限りの原書を買って来ました。大中小の辞書、地理書、歴史等は勿論、そのほか法律書、経済書、数学書などもそのとき初めて日本に輸入して、塾の何十人という生徒に銘々その版本を持たして立派に修業の出来るようにしたのは、実に無上の便利でした。ソコデその当分十年余もアメリカ出版の学校読本が日本国中に行われていたのも、畢竟（ひっきょう）私が初めて持って帰ったのが因縁になったことです。その次第は、生徒が初めて塾で学ぶ、その学んで卒業した者が方々に出

SAMPLE

て教師になる、教師になれば自分が今まで学んだものをその学校に用いるのも自然の順序であるから、日本国中に慶応義塾に用いた原書が流布して広く行われたというのも、事の順序はよくわかっています。

外国語の学習熱

明治時代に入って、英語、ドイツ語、フランス語などの外国語の学習がさかんに行われるようになる。特に、英語の需要は最も高かった。

明治十年代、英語熱はますます高まっていった。その一端を示すと、たとえば、『東京横浜毎日新聞』明治十八年二月八日号には、貴顕の夫人たちが英語がわからないと宴席などで不都合だというので、桜井女学校に通って英語を学んだとあるし、『日本たいむす』同年九月八日号には、英語を奨励するため全国学生の英作文を募集し、優秀者は表彰するということが行われたとある。後者の審査員はチェンバレン、神田乃武、吉岡哲太郎であり、発起人には坪内雄蔵（逍遥）も名を連ねている。

『団団珍聞』同十九年四月十七日号には、図2のような挿絵が載り、各種の英和辞典が刊行され、人々が英語の学習に駆り立てられているさまが諷刺されている。

図2　団団珍聞（明治19年4月17日付）

SAMPLE

しかし、同二十三年の教育勅語の発布によって忠君愛国などの国民道徳が説かれ、国家主義的な教育が目指されるようになると、さしもの外国崇拝にも歯止めがかかり、同二十六年には、井上毅（いのうえこわし）文相が英語教育以外はなるべく日本語を用いて教育するよう指示している。

キリスト教系の学校の設立

明治初期には、文明開化による西洋文化の流入や、英語などの外国語学習の流行に伴って、キリスト教系の学校の設立も相次いだ。当時、たとえば明六社で啓蒙活動を展開した津田真道（つだまみち）が「今ヤ宇内人民一般ノ開化ヲ助クル者、基教ニ如ク者ナシ」（「開化ヲ進ル方法ヲ論ズ」、明六雑誌、一八七四年四月）と指摘したように、キリスト教を信仰することが文明開化を受容する最も近道と考えられてもいた。

以下に、明治十五年までの、キリスト教もしくは宣教師と関係が深い、英語・女子の塾・学校を列挙しておきたい。(11)

文久三年　英学塾（ヘボン塾、バラ学校）
明治元年　静岡学問所、慶応義塾、開成学校（東京大学）
同　二年　カロゾルス塾（築地大学校）
同　三年　A六番女学校
同　四年　亜米利加婦人教授所（横浜共立学園）、熊本洋学校
同　五年　東奥義塾、大阪英和学舎（聖テモテ学校）

SAMPLE

同　六年　ブラウン塾、同人社、B六番女学校（新栄女学校）
同　七年　立教学校、女子小学校（海岸女学校）
同　八年　フェリス・セミナリー、照暗女学校（平安女学院）、同志社英学校
同　九年　成樹女学院（原女学校）、札幌農学校
同　十年　立教女学校、サンマー塾、同志社分校女紅場（同志社女学校）
同十一年　梅花女学校、耕教学舎（青山学院）
同十二年　永生女学校（プール女学院）、活水女学校
同十三年　ブリテン女学校（成美学園）、神戸女子伝道学校（聖和）
同十四年　桜井女学校、加伯利英和学校（鎮西学院）
同十五年　遺愛女学校

このように見てみると、今日でもよく知られている大学や高校が含まれていることがわかる。キリスト教の信者の数が日本で多数派を占めることはなかったものの、キリスト教系の教育と英語という結び付きが日本人の教育の主要な部分を律してきたという言い方なら納得されるであろう。

鷗外・漱石における反近代

〈洋〉が日本人に与えた衝撃は圧倒的であったろう。しかしだからといって、〈和〉〈漢〉が否定的にのみ扱われたわけではない。〈洋〉へのむやみな崇拝に対して疑義を呈した人々もいた。その代表格が、反近代の立場を

SAMPLE

取った森鷗外（一八六二～一九二二）や夏目漱石（一八六七～一九一六）であろう。

鷗外は、『妄想』（明治四十四年作）の中で、

自分は失望を以て故郷の人に迎へられた。それは無理も無い。自分のやうな洋行帰りはこれまで例の無い事であつたからである。これまでの洋行帰りは、希望に耀く顔をして、行李の中から道具を出して、何か新しい手品を取り立てて御覧に入れることになつてゐた。自分は丁度その反対の事をしたのである。（中略）食物改良の議論もあつた。米を食ふことを廃めて、沢山牛肉を食はせたいと云ふのであつた。その時自分は「米も魚もひどく消化の好いものだから、日本人の食物は昔の儘が好からう、尤も牧畜を盛んにして、牛肉も食べるやうにするのは勝手だ」と云つた。

と述べているし、漱石は、『私の個人主義』（大正三年講演）の中で、

近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向ふの人が兎や角いふので日本人も其尻馬に乗つて騒ぐのです。まして其頃は西洋人のいふ事だと云へば何でも蚊でも盲従して威張つたものです。だから無暗に片仮名を並べて人に吹聴して得意がつた男が比々皆是なりと云ひたい位ごろ〳〵してゐました。他の悪口ではありません。斯ういふ私が現にそれだつたのです。譬へばある西洋人が甲といふ同じ西洋人の作物を評したのを読んだとすると、其評の当否は丸で考へずに、自分の腑に落ちやうが落ちまいが、無暗に其評を触れ散らかすのです。つまり鵜呑と云つてもよし、又機械的の知識と云つてもよし、到底わが所有とも血とも肉とも云

SAMPLE

はれない、余所々々しいものを我物顔に喋舌つて歩くのです。然るに時代が時代だから、又みんながそれを賞めるのです。けれどもいくら人に賞められたつて、元々人の借着をして威張つてゐるのだから、内心は不安です。手もなく孔雀の羽根を身に着けて威張つてゐるやうなものですから。それでもう少し浮華を去つて摯実に就かなければ、自分の腹の中は何時迄経つたつて安心は出来ないといふ事に気がつき出したのです。

と述べて、そのためにも「自己本位」が必要だと述べている。

二人とも〈漢〉の素養によって育ったすぐれて日本的な（そういう意味で〈和〉的な）知性の持ち主であり、もちろん〈洋〉の教養も抜群だった。だからこそ〈和〉〈漢〉と〈洋〉の相容れなさを痛切に実感できたのである。

翻って、今日はどうか。国際化の波が激しく押し寄せてきて、何につけ欧米基準がまかり通っている。たしかにこれだけ世界が狭くなっている以上、国際性を持つことは必要だろうし、異なる国同士が相互に交流することで互いの価値が高まっていく部分も見逃せない。ただ、国際化するということは、基準が単一になるということだ。そこでは、合理性を追究し数量化されやすい〈洋〉のみが正当化されてしまう。しかし、日本語で育ったわれわれが〈和〉〈漢〉を捨ててしまったなら、根無し草のように頼りなく漂流するだけだろう。まして最近流行の英語重視の流れに乗って日本語まで捨ててしまったら、日本人というものの同一性（かりにそれが存在するとして）まで失うことになる。〈和〉〈漢〉のよさを持ったまま、国際化の中でどう独自性を保つか、こそが、進むべき目標なのではないだろうか。言い換えれば、グローバル化の中でローカルなよさを自他ともに認識することが求められているはずだ。あまりに問題が大きすぎて、ここでこれ以上展開することは困難なので、指摘にとどめておく。

SAMPLE

明治天皇と洋学

明治天皇（一八五二～一九一二）は、漢籍も学び、和歌も嗜んだが、洋学もかなり摂取している。『明治天皇紀』によって、その学習の一端をうかがってみよう。[12]

明治五年正月、明治天皇二十一歳の時、当時洋学がさかんに行われていたため、政治学者で侍講でもあった加藤弘之がドイツの法学者ブルンチュリの『一般国法学』を抄訳した『国法汎論』を進講した（正月七日条）。

同六年には、『国史纂論』（歴史書。国書。前出）とともに『西国立志編』（イギリスのスマイルズが著した『Self Help（自助論）』を訳したもので、個人主義を唱えている）の会読が行われ、他にも和歌御会が催されたり、ドイツ語の学習が施された（正月七日条）。

もっともドイツ語については翌七年「天皇之れを好みたまはず、終に廃せらる」となった（正月七日条）。

同八年には、『日本外史』の素読、『貞観政要』（唐の太宗と臣下との間の政治上の論議を集めた。帝王学の書とされた）、『仏国政典』（フランスの法律書。大井憲太郎訳）の輪読、『輿地誌略』（地誌。内田正雄・西村茂樹編。同三～十年刊）の講習などがなされており（正月七日条）、〈和〉〈漢〉〈洋〉の教養が偏りなく天皇の教育に注がれていると言えるだろう。なお、ここまで出てきた書物のうち、『西洋事情』『西国立志編』『輿地誌略』の三書が明治初期に最も普及したものと言えるであろう。

五　〈和〉と〈漢〉が融合して〈洋〉と対峙する

近世中期から後期にかけて、〈和〉と〈漢〉が融合していき、それらが新たな〈和〉となって〈洋〉と対峙す

SAMPLE

る。この場合、〈和〉が反近代、〈洋〉が近代とも見なせる。

日本漢詩文は、十八世紀末から十九世紀初めに到って、和漢融合が到達点に及ぶと言える。頼山陽の漢詩文を読んでいると、漢語本来の硬質な感じと和語が持つなだらかさが合致していたことがわかる。『日本外史』における川中島の合戦の描写を読んでみよう。

黄襖騮馬、白布を以て面を裹み、大刀を抜き、来り呼んで曰く、「信玄何くに在る」と。信玄馬を躍らせて河を乱り、将に逃れんとす。騎も亦た河を乱り、罵つて曰く、「豎子此に在るか」と。刀を挙げて之を撃つ。信玄刀を抜くに暇あらず。持つ所の麈扇を以て之を抗ぐ。扇折る。又撃つて其の肩を斫る。甲斐の従士之を救はんと欲すれども、水駛くして近づくべからず。

（原漢文）

ここには、漢詩文が日本語の一部として高度に定着している姿がある。

すでに指摘した通り〈和〉〈漢〉が充実していたからこそ〈洋〉の受容も容易になったわけだが、それは〈和〉〈漢〉が融合した新たな〈和〉についても言えることである。

近世までの〈和〉〈漢〉、それが統合された新たな〈和〉が〈洋〉を受け入れて、〈和洋折衷〉のしなやかで力強い日本的教養が形成していく過程、それこそが十九世紀の日本文化の流れなのだ。

SAMPLE

六　国民国家と教養の生成

その際、留意すべき点がもう一つある。それは、明治時代における教養のありかたは、近代国家として欧米列強と伍していこうとする上で、有用な人材を養成するという目的に即して形作られているということである。天皇を元首に戴き、臣民が日本国家に貢献するという機構の中で、教養のあるべき姿も模索されたのである。言い換えれば、江戸的教養は西洋という要素を加えた上で国民国家を創造するために再編されたわけだ。

もちろん教養には、個と個の関係において互いの考えや感情を伝え合うことを円滑にするための手段といった側面もある。それは明治時代にも有効に機能していた。

全体的なものに奉仕するための教養と、個々の関係が積み重なっていき公共性が築かれていくための教養とが、どう組み合わされることがよりよい社会の形なのか、それは普遍的な課題でもある。

注

（1）拙編『浸透する教養 江戸の出版文化という回路』（勉誠出版、二〇一三年）において論じた。

（2）拙編『形成される教養 十七世紀日本の〈知〉』（勉誠出版、二〇一五年）において論じた。

（3）この点については、長島弘明編『国語国文学研究の成立』（放送大学教育振興会、二〇〇七年）第二章「大学の設置と国文学研究」（長島氏執筆）、大久保利謙『明治維新と教育』（『大久保利謙歴史著作集』4、吉川弘文館、二〇〇七年）、田中康二『国学史再考』（新典社、二〇一二年）第十章「維新期の国学」などに詳しい。以下、学制改革の記述は、これらの書に拠るところが大きい。

（4）前掲注3大久保書、二三一―二三九頁。

SAMPLE

（5）『国学者伝記集成』続（国本出版社、一九三五年）に拠る。田中仁氏が詳しい論考を準備中である。
（6）近年、飯倉洋一・盛田帝子編『文化史のなかの光格天皇――朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』（勉誠出版、二〇一八年）が刊行された。
（7）青山英正・田中仁・長福香菜・松澤俊二各氏の論考が備わり、近年充実した研究分野である。拙稿「三条西季知『恵仁春乃陰』をめぐって」（日本文学研究ジャーナル、二〇一七年十二月）も参照されたい。
（8）拙著『江戸詩歌史の構想』（岩波書店、二〇〇四年）六二―八六頁。
（9）岩波文庫『日本外史』所収の頼惟勤「『日本外史』への手引き」参照。
（10）同様のことを、ナイアガラの滝についての漢詩によって述べた。拙著『日本漢詩への招待』（東京堂出版、二〇一三年）一七八―一八〇頁参照。
（11）鈴木範久『日本キリスト教史』（教文館、二〇一七年）一〇四―一〇五頁を参考にした。
（12）伊藤之雄『明治天皇』（日本評伝選、ミネルヴァ書房、二〇〇六年）一三七―一三九頁を参考にした。

SAMPLE